

2019年度(第34回)日本鳥類標識協会全国大会(我孫子大会)報告(※)

脇坂英弥(京都府)

※この文はバンダーニュース No.68(日本鳥類標識協会 2020年3月)p2~8のテキスト文に加筆したものです。バンダーニュースには多くの写真も掲載されています。

【はじめに】

2019年度の大会は2019年12月14~15日、千葉県我孫子南近隣センター(けやきプラザ)を会場として開催されました。

開会15分前に到着した私ですが、受付を済ませて会場に入るやいなや、すでに満席に近い状態であったことに驚きました。初日の公開シンポジウムは「バンディングでわかること—鳥類標識調査の成果と未来—」。一般の方の参加も可能であり、多くの方々が標識調査に関心があることを物語っています(公開シンポジウムの参加者数は120名、うち一般参加者数は42名)。

我が国における標識調査は1924年より開始され、これまでに累計500万羽以上が標識放鳥されています。無論その過程で多くの鳥類の生態解明がなされてきましたが、調査の意義や成果が一般の市民やバードウォッチャーに理解されているとは言い難い状況にあります。当然ながら標識鳥の発見(回収)には多くの方々の協力が必要不可欠です。これからの標識調査の発展を推進するにあたり、今回の公開シンポジウムは意義深いものになったのではないのでしょうか。

【公開シンポジウム】

鵜澤菜夫氏・吉川紀愛氏のおふたりから、環境省のおこなう標識調査事業の概略や意義、調査結果の公表についてお話いただきました。1924年に我が国で最初に放鳥された鳥はゴイザギであったとの紹介から(当時は農商務省)、戦争による調査の一時中断を経て、林野庁・環境庁(現在の省)の委託調査として山階鳥類研究所が継続的に実施しているとの説明がありました。「[鳥類アトラス web-GIS](#)」を利用すれば鳥の移動経路が視覚的に把握できることや、今後は既存バンダーの知識・技術の更新の場を設けるためにバンダーに対する講習会も予定されているとの説明がありました。

尾崎清明氏からは、これまでの標識調査で得られた成果の総括がありました。従来、鳥の渡りについては繁殖期と越冬期の分布を関連づけて推測するしかありませんでしたが、回収記録の蓄積にともない実証的な渡りの解明が進みました。加えて野外観察では確認されづらい識別困難種や潜行種の捕獲記録により、国内での新記録種や地域の鳥相の把握に貢献していること、測定値・換羽状況・外部寄生虫・DNA情報のサンプリングへの応用に関して説明がありました。余談として69歳という世界最高齢のコアホウドリ、日本から太平洋を越えてアメリカへ移動したハヤブサ、イタチザメの胃袋から回収されたオオヨシキリの足環の紹介は興味をそそりました。

仲村昇氏からは、モニタリング手法としての標識調査の活用について国内外の事例を挙げて紹介がありました。北米では政府職員が多数のカモ類に標識をしています。課題は標識鳥を捕獲したハンターの報告率。この解決策がユニークで、一部の標識には「報告すれば礼金を支払う」といった旨の刻印があり、その礼金足環と通常足環の回収率の比から報告率を算出しているそうです。

澤祐介氏は、2016年から進めているコクガンの渡り解明について紹介しました。本種の生息する沿岸部の浅瀬は多くの潜在的な脅威に直面しており、主要な生息域を早急に解明する必要があることを主張。捕獲技術の開発など、試行錯誤を繰り返す苦労の様子が垣間見られました。また、自身が2019年からはじめた龍谷大学の集中講義の経験から自然系教育として標識調査が活用できることを紹介しました。

【総会・懇親会】

総会では、昨年のお阪大会同様に協会会計の逼迫に対して多くの意見が交わされ、また標識協会のメーリングリスト作成計画が承認されました。学生や若い世代の会員を獲得して、今後多くの課題を共に解決したいものです。

懇親会は会場から離れたミライザカ柏西口店で開かれ、美酒を交わしながら親睦を深めました。

【一般講演】

2日目はメインプログラムである一般講演です。最初の2題はケリに関するもので、それぞれ栃木県（河地辰彦氏）と京都府（脇坂英弥）で色足環をつけたケリの移動に関する内容でした。栃木の個体群は100km以上南下して、南関東の利根川流域や相模川流域の水田地帯で越冬することが分かりつつありますが、京都の個体群は色足環の観察記録が少なく、いかに観察記録を増やすかが課題との報告でした。両地域の調査もバードウォッチャーやカメラマンの協力が不可欠であることは言うまでもありません。

鳥飼久裕氏らは、奄美群島でのみ繁殖するアマミヤマシギの調査状況について紹介しました。標識データをもちいて生存年数を検討したところ、最大生存年数は8年以上であることを報告。一方で幼鳥の死亡率は成鳥に比べて高いことが示されるなど、標識調査が生存期間や生存率、個体群に影響を与える要因等を把握することが可能になる有効な調査手法であることを示唆しました。

片岡宣彦氏からは、石垣島においてシマセンニュウの越冬を確認したとの報告がありました。文献では1982年2月に西表島での越冬記録があり、それを検証するために石垣島で標識調査を実施。放鳥数は少ないもののRt再捕があることや越冬地であるフィリピンにおける本種の換羽と同様の換羽が確認されたことなどから、本種が越冬している可能性が高いことを示しました。

茂田良光氏らより、三重県でのマックスミズナギドリの記録について最新の知見などを検討した結果、オガサワラミズナギドリの誤同定ではないかとの指摘がありました。

ジシギの尾羽（枚数と形態の性・年齢・地理的変異）を調べた小田谷嘉弥氏からは、オオジシギと同様にチュウジシギにおいても尾羽の枚数に性差があることが確認され、尾羽の枚数が本種の性判別に有効であるとの報告がありました。

本間隆平氏は、瓢湖でキンクロハジロ幼鳥として放鳥していた個体が、じつはコスズガモ幼鳥との誤同定だったと、その経緯を説明されました。瓢湖で多数放鳥されるキンクロハジロ幼鳥の性判別は難しく、全個体の総排泄腔を確認して判別しているそうですが、そうした煩雑さに追われて同定を誤ったとのこと。ちなみに今冬にも標識されたコスズガモが渡来しているらしく、これの再捕獲を目論んでいるのだとか。さて成功したのでしょうか。

平岡考氏らは、上嘴の骨折が自然治癒したと考えられるクサシギが一年以上生存した事例を紹介し、この個体の観察から本種の越冬期の場所固執性の実証にもつながったと言及しました。

北海道での調査状況について富川徹氏から報告がありました。調査は野幌森林公園、宮島沼、礼文島と広域で実施されており、各地の異なる環境に関連した鳥相を説明されました。今後は保護に向けたデータ解析と調査継続のためのバンダー育成が課題となっているようです。

島根県でのアカショウビンの12年間の放鳥記録について、星野由美子氏らより報告がありました。これまでアカショウビンの総放鳥数は69個体ですが、海外Rc記録がないことから、軽量で安価であるジオロケータ（照度記録装置）を14個体、GPSロガーを16個体に装着しているそうです。トラブル等もあり現状ではロガー回収後の解析には至っていませんが、今後の動向が気になります。ちなみにGPSロガーの値段は1個5~6万円。再捕獲をしてロガー回収ができるのであれば有効な調査法と言えますが、やはり調査費用をどう工面するかが課題になります。

「自ら設定した調査地で自身の調査を行なうバンダーは、市民科学者の最先端のひとつの形」だと述べる森本元氏からは、バンダーと他の鳥類研究者との研究傾向を様々な角度から比較した報告がありました。

最後に水田拓氏より、非バンダーの立場から鳥類標識調査への期待と題した発表があり、400名以上のバンダーが従事し、年間12万羽を超す放鳥数があるにもかかわらず、移動や年齢以外に分かっていることがそれほど多くないことを指摘。捕獲して足環をつけて放し、回収を期待するだけではなく、個々のバンダーがテーマや目的意識をもつことが重要との助言を加えました。標識調査への予算の割り当てが永久に続くとの保証はなく、成果が乏しければ打ち切りになることもあり得ます。大切なことは論文、地元での講演、地元紙、大会発表などを介して成果を発信し続けることだと、苦言を呈されました。

【エクスカージョン】

閉会挨拶後は恒例の記念撮影をし、その後は希望者のみ2会場で実施されるエクスカージョンへ参加しました。

私は山階鳥類研究所の見学に参加しました。標識センターでは、書棚に整然と並べられたオリジナル集、棚にびっしりと収まっているカスミ網、ボックスに整理されている膨大な金属リング、リング番号を検索するためのデータベースを順にご案内いただきました。印象に残ったのは、山積する資料に埋もれたスタッフ皆様（一部？）のデスク。多忙を極める日々の様子がリアルに伝わってきました。標本室では、どうしても見たかったミヤコシウビン（1887年2月に宮古島で採集された空前絶後の標本）とカムムリツクシガモ（世界に3点しかない絶滅鳥）をリクエストするまでもなく出してくださいました。

見学を終えて会議室へ移動する際、廊下の大きな窓ガラスに目を向けると、鳥の衝突した痕跡が残っていました。「衝突した鳥でも元気であれば足環をつけて放鳥していますよ」とのこと。もちろんですね。

ところで、我孫子市鳥の博物館で開催されたワークショップ「比べてみよう！みんなの計測値」はどのような内容だったのでしょうか。とっても気になっています(※※)。

※※バンダーニュース No.68(日本鳥類標識協会 2020年3月)p9~12には小田谷嘉弥さんらによる測定法のワークショップの報告が掲載されています。

【おわりに】

年に一度、バンダーや標識調査にかかわる協力者の皆様と交流を深められる協会の全国大会は極めて貴重な場であり、大会参加を心待ちにしている協会員は少なくありません。我孫子大会の2日間の参加者数は82名（事前申込76名、当日参加6名）あり、皆様とお会いし、パンチの効いた刺激を受けることで、私自身が標識調査を続けているモチベーションは何なのかを改めて考えることができました。

大会に参加された皆様、お疲れ様でした。そして大会実行委員の皆様には感謝申し上げます。本大会が標識調査のより一層の発展に寄与することを願います。